

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科 ドイツ語学・ドイツ文学専修 博士課程1年 益 敏郎

本報告は、主に研修 3 日目、ハイデルベルク大学での文化越境研究センターの紹介および当センターでの難民問題についてのワークショップを対象とすることを、まずは断っておきたい。

ハイデルベルク文化越境研究センター(Heidelberg Centre for Transcultural Studies)と京都大学文学研究科との共同学位(Joint Degree)制度には、大きな衝撃を受けた。パートナー大学への留学といったいくつかの条件をクリアすれば、1つの修士論文で両大学の学位を得られると言うのだから。これは、研究および学生交流の国際化を強力にバックアップする制度になりうると感じた。残念ながら報告者はすでに修士号を取得しており、当制度の候補生には当たらないが、学部生にとっては、特に研究者を目指す者でなくとも、一度は検討に値する選択肢であると思う。

文化越境研究に関しても、研究分野を厳密に確定するのではなく、逆に積極的に拡張しようという姿勢が鮮明であった。そのことはセンター構成員の研究対象の多彩さにも表れていたように思う。もちろん本来的に、あらゆる学問は文化越境的な要素を含んでいるはずであり、歴史現象がグローバルに作用しないということもあり得ない。しかし各分野がたこつぼ的に視野狭窄に陥りつつある昨今の学問状況において、またグローバリズムが加速度的に進展する現代において、あえて文化越境と称する研究は、今日的な課題に応える方法論として要請されるものであり、その可能性や将来性において非常に魅力ある研究分野に思われた。

当センターで開かれた難民問題についてディスカッションを行うワークショップは、研修の中でも特に印象に残る体験であった。そこではドイツ人がむしろ少数派であるほど、構成員の人種や国籍が多様であり、かつそのような多彩なバックグラウンドを持つ人々が、共通言語として英語で闊達に議論し合っていた。この光景には、目の当たりにして初めて感じる驚きがあった。特に目を見張ったのが、あちらの学生の、自分の考えを簡潔にまとめ、力強く主張する能力である。これは翻って、自分の意見を英語で表明するスキルを磨く必要性を痛感させるものでもあった。しかしそれにしても、それぞれが自分の意見をはっきりと真剣に述べながら、排他的にも陰悪にも全くならない議論の雰囲気は、素晴らしいものだった。

また学生はおろか大学教員でさえ昨今の難民問題に関して、メディアで繰り返し主張されている以外の対策を見出せずにいる状況にも、感じるところが大きかった。戦後、多様性を重んじる文化をリードしてきた欧州が、その危機的状況において、今まさに解決策を模索している姿を肌で感じることは、類似する問題に直面する日本の現状に鑑みても、きわめて有意義であったと思う。

研究状況として文化越境的な活動や大学間の国際的な交流が求められ、大学側の制度としてそれを後押しする環境が拡充されつつあるのを実感した。それはこの派遣プログラムに関してもそうであった。先生方、事務担当の方の親切なサポートや、綿密でかつ無理のないスケジュール調整など、配慮の行き届いた運営で、非常に充実した研修の機会を与えていただいた。この場を借りて、深く感謝を申し上げたい。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科 フランス語学・フランス文学専修 博士課程 1年 横田 悠矢

今回のハイデルベルク、ストラスブール両大学の訪問では、施設見学および現地の学生たちとの交流を通じて、それぞれの大学での日本学研究環境や、留学に対する学生たちの意識への理解が深まった。なお内容の重複を避けるため、本報告書では3月1日(火)に実施されたハイデルベルク大学のクラスター(Cluster of Excellence "Asia and Europe in a Global Context")紹介に焦点をあてる。本派遣プログラムの他の日程については、他の参加者の報告書を参照されたい。

ドイツ政府の助成を受けて2007年に設立されたクラスターは、研究者間の学際的なネットワークを構成し、文化越境的な研究の推進を企図するものである。研究領域は1) Governance & Administration、2) Public Spheres、3) Knowledge Systems、4) Historicities & Heritageの四つである。いずれの場合も背景には、語の隠れた意味における「文化越境」の考え方、すなわちそもそも越境的でない文化、純粋に単一の文化は存在しないという考え方があり、たとえば西洋と東洋という二分法に典型的に見られるような、従来の学問が抱える構造的な問題を乗り越えようとする意図が存在する。ただし、その乗り越え方については必ずしも領域間で統一された理論が確立されているわけではなく、むしろ文化越境的な研究とは方法論的な視点に根ざした理念であるという印象を受けた。在籍する学生の専門は多岐にわたり、その国籍や経歴も様々である。奨学金の支給やカウンセラーによる研究面での相談など、円滑な学生生活を支援するシステムが整っている点、また若手研究者によるプロジェクトを複数発足させるなど、研究者養成にも力を入れている点などは、クラスターの大きな特徴として挙げられるだろう。

共同学位プログラムの基本合意書締結記念である本派遣プログラムにおいて、クラスターで実際に学ぶ学生と交流し、また難民問題をテーマに議論する機会を得たことは、ヨーロッパの学生が自文化の直面する問題に向き合いながら、同時にアジアと関わる問題意識をいかに「文化越境的」に模索しているのかを知る好機となった。とりわけ、文化越境的という言葉の意味を探しながら研究を続けている、というある学生の言葉は印象的だった。

報告者は今夏よりフランスへの長期留学を予定しており、今回ヨーロッパの教育・研究機関を見学できたことは、越境的でない文化は存在しないという考え方を再認識しつつ、自らも異文化のなかで研究を行う意欲をいっそう高める、非常に意義深い体験となった。

2017年以降、京都大学・ハイデルベルク大学間で共同学位プログラムが本格的に始動することで、多くの学生が両国で学び、また文化越境的な研究が盛んになることを願ってやまない。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学部 言語学専修 3年 林 紀言

今回の派遣を通して、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の見学および現地の学生たちと様々なテーマについて意見交換をした。例えば、シリアの難民問題のみならず、フランスの進学指導や、日本とフランスの男女平等、近代日本における女性運動など、かなり幅広いテーマをめぐって交流を深めた。

プログラムの初日には、ハイデルベルク大学を訪問し、それから当大学の日本学研究科を見学した。その図書室の蔵書量は図書館並みと言っても過言ではないと思う。日本史や日本社会、日本芸術史、日本経済などの日本語の書籍や学術誌のほか、英語で書かれた日本に関する書籍もある。見学の時に、ちょうど当研究科の30周年の展示会が行われていた。図書室を見学してから、その展示会を見て、ハイデルベルク大学は30年間の努力でいろいろな日本の研究資料や参考書など集めて現在の図書室が築かれたことがわかり、非常に感心した。

このプログラムでは、他大学とのワークショップや他大学の見学などもできたが、このレポートでは、主にストラスブールにある国立大学図書館の見学を書こうと思っている。この図書館はフランスでは二番目に古い図書館である。さらに、この図書館は当地にあったフランスとプロイセンの戦争の後でドイツ帝国によって作られたため、図書館の建築様式はドイツ風とフランス風が組み合わせたものである。しかし、見学の担当によると、今年はその図書館のリニューアルしてからの四年目であるらしい。よって、歴史は二番目に古い図書館と言っても、図書館の設備が実際はかなり新しくできたとも言える。特に、図書館の外見のみならず、館内のインテリアもできるだけリニューアルの前の様子を残していて、それを電子検索システムや書庫にある火災予防システムなどといった現代的な技術に合わせるようにアレンジしていることがかなり特別なところである。それを見ると、ちょっと自分がタイムトラベルで17世紀のストラスブールに行った感じがした。その図書館をもうちょっと回ってみると、そこには法律や社会、地理、哲学、神学などといった幅広い分野の本が所蔵されていることがわかり、この図書館がどれほど研究に役に立つところであるか、実感した。

今回のプログラムに参加したおかげで、ハイデルベルクやストラスブールの大学生との交流ができた。しかし、もっとも予想していなかったことも今回のプログラムによってできた。それは両大学の研究者と自分の研究テーマについてたくさんの相談ができたことである。彼らと色々議論しながら自分の興味があるテーマもどんどん増えてきて、それから彼らの経験を聞きながら自分の将来のために色々考えた。さらに、ハイデルベルクとストラスブールの学習環境の見学を通して、大学院進学の情報収集がうまくできたと思う。もしこのようなプログラムが長く続けられると、他大学との関係が強化できると考えられる。そのみならず、進学するつもりの方の学生のための情報収集も簡単にできると考えられる。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 地理学専修 3年 田畑茉里香

ハイデルベルクの街、京都大学ハイデルベルクオフィス見学、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の学生との議論を中心に報告する。

ハイデルベルクに到着した翌日、ハイデルベルク城とカール・テオドール橋などを訪れた。ハイデルベルクは驚くほど落ち着いていて美しい街であった。広場には、ナチス政権下で行われた焚書の記念碑があり、過去の反省を胸に刻み続けるドイツ人の精神を感じ取ることが出来た。

ハイデルベルク大学京都オフィスを訪れた。京都大学は、欧州の高等教育機関や産業界と京都大学をつなぐ拠点をロンドンとハイデルベルクに置くことで、国際競争力ある研究の推進、国際力豊かな人材の育成、国際貢献の推進を目指している。ハイデルベルクオフィスは、以下のような使命を持っている。

### 1、 京都大学の欧州地域における研究活動の支援

欧州地域の学術動向等情報の収集および発信、国際共同プロジェクト運営支援など。

### 2、 京都大学の欧州地域における教育活動の支援

ヨーロッパ諸大学と京都大学の交流の推進や、日本留学希望者への情報提供や相談など。

### 3、 教職員・学生の国際化の推進および広報

教職員・学生の欧州地域におけるインターンシップ、能力開発プログラムの企画など。

### 4、 広報・社会連携・ネットワークの形成を推進

学術交流協定締結先等・欧州地域の政府関係機関との連携強化など。

ハイデルベルクオフィスは、日本で留学したい学生や、欧州で留学したい学生の支援をしているだけでなく、様々な役割を果たしていることが分かった。

次に、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の学生と難民問題について議論したことから考えたことを報告する。

印象的だったのは、ドイツとフランスの難民に対する考え方の違いである。ハイデルベルク大学の学生の多くは、難民受け入れに積極的であり、ドイツはまだまだ難民を受け入れられると考えていた。一方ストラスブール大学の学生からは、フランスがイスラム教徒を一方向的に阻害しているのではなく、イスラム教徒側にも異文化を寄せ付けない意識があるという意見や、苦勞して納めた税の多くが難民のために使われることを不公平だという考える人が数多くいるという意見を聞いた。この意見の相違の背後には、ドイツは好景気だがフランスは深刻な不景気であることや、ドイツでは少子高齢化が進んでいるがフランスは若者が多く失業率が高いことなどの社会経済的相違、ドイツ人はヒトラー政権下に犯した人種差別の罪を今も反省しているという歴史的相違などの要因があるということだった。ハイデルベルクとストラスブールは距離的に見ればあまり離れていないが、それぞれの国の社会システムや歴史は大きく異なっており、それが難民への意識に影響しているようであった。

また、欧州の学生の、政治や社会情勢への関心の高さに刺激を受けた。両校の生徒は、難民受け入れに積極的であれ、消極的であれ、自分の意見とその理由を持っていた。日本の若者はどれだけ難民問題を理解しているだろうか。どうして日本は難民受け入れに消極的か、どうすれば受け入れられるか、考えている日本人はどれだけいるであろうか。

また、難民問題に限らず日本の政治や社会情勢に関しても、どれだけ日本人は関心を持っていて自分の意見を持っているであろうか。多くのことを考えさせられた研修であった。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 英語学英文学専修 2年 坂本 晃平

今回の研修の主たる目的は、京都大学文学研究科とHeidelberg Center for Transcultural Studiesで設置される予定の共同学位プログラムを前に、海外大学の学習環境を見学することであり、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学を訪問しました。

特に今回のプログラムでは、よりよく海外大学の環境を肌で感じるために、実際に現地の学生とシリア難民などの「移民問題」をテーマにディスカッションを行ったりもしました。特にハイデルベルク大学の学生とのディスカッションは白熱したものであり、ヨーロッパの学生が「移民問題」について、自分たち自身に関わる問題として大きな関心を寄せていることが覗えました。また、彼らの視点もメディアの報道に縛られた一面的なものではなく、移民問題、すなわちRefugee Crisisが本当に“Crisis”であるのかを、歴史上の難民問題と比較したりしながら多様な視点から分析していくもので、大いに感心させられました。また、昼食を取りながらの交流の時間には、中国文学や日本文学をはじめ西洋文学、東洋史、西洋史と幅広い分野が話題にありましたが、文化同士の出会いという視点から文学と歴史とを関連づけながら読み解いていく話はとても興味深く感じられました。こうしたことから、この様な多様な視点に満ち溢れた場で学習する機会のある共同学位は非常に有意義なものであると思われまます。

また、研修の中でハイデルベルク大学・ストラスブール大学の日本学科を訪問しましたが、ハイデルベルク大学では明治時代を中心とした文語、ストラスブール大学では古語の授業が必修である、ということに驚かされました。実際に学生たちも夏目漱石や百人一首を読んだと言っており、両大学日本学科のカリキュラムが単に実用的な語学の学習に留まるものではない、重厚なものであるとの印象を受けました。日本での外国もしくは外国語学についてのコースも同様に、文化の深層までの理解にしっかりと取り組むべきであると感じずにはいられませんでした。一方で、日本学科の学生の多くが日本への留学を経験しており、大変流暢な日本語を話したのも印象に残っています。日々英語を外国語として学んでいる私にとって、これは多きな刺激になりました。

最後に、私は将来、海外の大学院なども視野に入りたいと漠然と思っていたのですが、今回の派遣でまた一つ共同学位と言う選択肢が見つけられたことをありがたく感じています。今後共同学位のような魅力的な選択肢をハイデルベルク大学と意外にも広げていくことは、大変意義のあることではないでしょうか？

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 西洋史学専修 2年 佐守真帆

今回の研修ではハイデルベルク大学・ストラスブール大学の研究環境を見学し、両校の学生や教授の皆さんと議論や交流を行った。ハイデルベルクでの諸活動も非常に興味深いものであったが、ここではストラスブール大学での活動について主に報告を行う。

まず、以前ストラスブール大学へ留学されていた京都大学博士一回の横田さんの案内でストラスブール大学のキャンパスを見学してまわった。広大なキャンパスの中には学部棟が点在していたほか、日本の大学ではあまり見かけない語学学校という施設も存在した。この語学学校は、留学生などフランス語がまだ十分に運用できない学生を主な対象とする施設だそう。フランス語がうまく話せない状態で留学したとしてもこの語学学校できっちりと語学教育を受けながら講義を受けることができるという点は、語学力の面から留学をためらっている学生にとっては非常にありがたいことだろう。他にも留学生向けのセンターや留学生でも入居できる学生寮など、留学生のための施設が整っているという印象を受けた。

その後ストラスブール大学日本語学科修士課程の皆さんとの交流や発表を行った。交流会では一緒にランチをいただきながら、ストラスブール大学の皆さんの日本への興味内容や互いの研究についてなど、ざっくばらんな会話が行われた。ハイデルベルク大学の学生さんもそうだったが、ストラスブール大学の学生さんについても「日本のアニメ、漫画」という方が意外に多かったことが印象に残っている。その後、京都大学からは本研修のテーマでもある「移民、難民」に関する発表、ストラスブール大学からは日本の女性運動家についての発表と日仏間の学校制度の差異についての発表が行われた。ストラスブール大学の皆さんとの会話はすべて日本語で行われたが、大学に入ってから学び始めたとは思えないほどの流暢な日本語を話す方も多く、非常に驚かされた。

この研修を経て私は「外国語を聞き、話せること」の重要性を再認識させられた。今回の研修の中で私は、英語ができないがために相手の言うことをなんとなくでしか理解できなかったり、自分の考えを完全に伝えられなかったりという場面を多く経験した。一方、博士課程のお二方は英語の他にドイツ語やフランス語をも駆使して様々な方とコミュニケーションを行っていらつやつた。もし私が他言語を駆使できていれば、この研修で私が得られるものはまた変わっていたはずである。ある程度学問の世界を深めていくためには外国語、特に英語が話せることが不可欠になっているということなのだろう。今後は英語を有効なコミュニケーションツールとして使えるような学習をしていきたい。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 二十世紀学専修 2年 角 あかり

初めに、ハイデルベルク・ストラスブール研修 1 日目について報告する。1 日目は、ハイデルベルクにて旧市街・ハイデルベルク城の見学、学生牢の見学、京都大学ヨーロッパセンター・ハイデルベルクオフィスの見学、ハイデルベルク大学の図書館の見学、そして同大学の東アジア学科の見学を行った。

ハイデルベルクは、可愛らしい色合いの街並みが続く、歴史ある落ち着いた街であった。ハイデルベルク城は、戦争の跡を生々しく残した負の遺産としての一面をもつ一方で、精巧な装飾の施された建造物が美しい、非常に立派な城跡であった。学生牢は名前とは裏腹に、学生の横顔の影絵などが壁一面に落書きされた、当時の学生たちの遊び心溢れる場所であった。同建物内にある京都大学ヨーロッパセンター・ハイデルベルクオフィスを訪問した際は、HeKKSaGOn(ヘキサゴン)やオフィスの成り立ち、4 つのミッションについてオフィス長の方からお話して頂いた。学生の立場からみると、欧州に留学した場合、このようにサポートをして頂いて情報を得たり出来る場所があることは非常に心強いと思った。ハイデルベルク大学東アジア学科では、先生から学科や学生数、講義などについて説明して頂いた後、学科内をじっくりと見学した。3 つの図書室には日本に関する多岐にわたる分野の書物が所狭し並んでいて、そこには慣れ親しんだ日本と、日本に暮らす私も知らない日本の歴史や文化があり、非常に感心した。豊富な資料のある、整った、充実した研究環境であると感じた。

そして研修全体を通しては、ハイデルベルクとストラスブールの街・人・雰囲気・食など様々なものを一身に感じる事が出来て、非常に貴重な体験をしたと思う。異国において異文化体験をすることは非常に大切な経験である事を強く実感した。また、この研修では現地の先生や学生、スタッフの方々との交流にも重きを置かれており、自分とは異なった文化の中で暮らす彼らと様々な会話をし、共に食事をしたことは私にとって非常に新鮮で有意義な時間であった。また、ハイデルベルク大学では英語、ストラスブール大学では日本語でワークショップを行い、その後学生同士の交流を行った際には、非母国語でこのように深いコミュニケーションを取ったりディスカッションで熱く議論を行ったり出来るレベルにある学生たちに非常に刺激を受け、自分も今学んでいる外国語の運用能力をもっと磨いていこうと強く思った。そして、学科見学やワークショップ、レセプションを通して自らの学問に対する意欲が非常に高まった。シリア難民問題についてのワークショップにおいては、歴史的観点から、ドイツ・フランス・日本という各国の視点から、また個人個人の視点からなど様々な切り口から考えていった。ここでの議論に終わらず、今後も解決の糸口を考えていこうと思う。更に、日頃から世界の現状や問題に目を向けて自分なりの考えをもとうとも思った。

この研修に参加したことで、国際的な視野も広がり、将来の選択肢もまた一段と広がったように感じる。共同学位が締結された大学、なかなか行く機会のない海外にある大学を訪れて研究環境や講義風景を自分の目で見たり参加したり、また土地や人・食などを含めて様々な面から感じたりすることの出来るこの研修は、海外で学ぶということの現実味が増し、今の、そして将来の自分に大きな影響を与えるものとなり、非常に有意義で濃密なものであった。それに加えて、これから海外留学の機会を積極的に得て海外に出ようという志をもつきっかけとなった。また、普段の大学の講義でも英語講義をとって英語で議論をし、ディスカッションやプレゼンテーションを行う授業を受講して積極的に学ぶ姿勢をもとうと思った。それだけでなく、外国で異文化に触れたことで、自分が暮らす、母国である日本についてももっと関心を持って学んでいこうと思った。今回の研修はあらゆる面からみて非常に有意義で充実した、素晴らしいものであった。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学部 現代史学専修 2年 白坂彩乃

当プログラムにおいては「移動と文化越境」をテーマとして、とくに難民問題についてハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学生と意見交換を行った。ここでは、主にストラスブール大学での学生とのワークショップを中心に報告する。

ストラスブール大学でのワークショップは、日本語学科の修士・博士課程の学生と行った。今回のワークショップでは、我々京都大学側は難民問題についてのプレゼンテーションを、ストラスブール大学側は各々の研究テーマについてのプレゼンテーションを行い、発表後は質疑応答・意見交換を行った。

まず京都大学からは3つのグループがそれぞれ、難民犯罪への対応策の提案、日本とフランスの難民受け入れ政策への提言、難民の就労問題への解決策を発表した。今まさに難民の流入に直面しているヨーロッパの一国、フランスの学生から直接意見を頂けたのは貴重な経験であった。難民を受け入れる際には、それが招くリスクを正確に判断して、それにあった策を考えることが重要であると改めて確認した。次にストラスブール大学から、3人の学生がフランスの進学制度、日本の男女の社会進出格差、近代日本のフェミニスト運動について発表した。ワークショップ前の交流会でも感じたことだが、日本語学科の学生はそれぞれ日本のことを研究テーマに据えていた。しかし具体的なテーマとしては江戸時代の上層経済から現代のジェンダーに関する問題まで多岐にわたっており、興味深かった。発表は自らの国と自分の研究対象とする国との比較がまず念頭に置かれていて、そのうえで共通点や相違点について言及しており、異国・異文化研究の方法論として参考になった。

ハイデルベルク大学でのワークショップは英語で行ったが、前述のワークショップは日本語で行った。そのため、ストラスブールの方がこちらとしてはスムーズに意見交換ができたが、このプログラムを通して、聞く・話すための英語を学ぶことの重要性を再認識させられた。そして、日本のメディアが報道する外国の出来事は一面的であることが多いが、それを鵜呑みにせず自らの目や耳で判断することが必要である。そのためにも、聞く・話すための英語力をつけて、積極的に外国人学生と交流すべきであると考え。自分自身研究テーマには外国のことを据えるつもりであるので、今回のプログラムに参加して、さらに海外留学への意欲が増加した。このような貴重な機会を与えてくださった方々に感謝したい。